

高度経済成長期からの 福岡市における 魚類の購入数量の変遷 全国と比較して

Change in Consumption of Fish in Fukuoka City since
the High Economic Growth Period Compared to other Areas

宮内貴久

MIYAUCHI Takahisa

はじめに

① 高度経済成長期の福岡市における魚類と肉類の購入数量

② 全国鮮魚購入推移1980～2020

③ 福岡市鮮魚購入推移1980～2020

④ マグロは好まない

おわりに

【論文要旨】

本稿は福岡市南区弥永団地周辺をフィールドにして、聞き取り調査と総務省『家計調査年報』を手がかりにして、高度経済成長期の福岡市における魚類と肉類の購入数量を検証した。鮮魚の購入数量が1953年の69,761kgから、1975年の21,135kgまで激減する。サバ、アジの次に購入されるのが、年によりカレイ、イワシ、ブリ、タイと変化していく。マグロ、カツオ、サケの購入数量は微量で、高度経済成長期を通じて変化しない。肉類の購入数量は、1965年まで牛肉が一番であり、豚肉、鯨肉、鶏肉の購入数量はほぼ変わらない。1960年代後半から大きく変化し、豚肉、特に鶏肉の購入数量が激増する。肉類の購入数量の増加は急激で、1972年には肉類の購入数量が鮮魚購入量の倍以上になる。

1980年以降の鮮魚の購入数量について全国と福岡市を比較した。

1980年の全国の鮮魚の購入数量は、マグロ、サバ、カレイ、ブリ、イワシ、サンマ、アジ、カツオ、サケ、タイという順だった。魚種により増減がみられた。2020年はサケ、マグロ、ブリ、カツオ、サバ、アジ、サンマ、カレイ、イワシ、タイの順に変化した。

1980年の福岡市の鮮魚の購入数量は、サバ、イワシ、アジ、カレイ、タイ、ブリ、サンマ、カツオ、サケ、マグロという順であり、全国の魚種の割合とは異なった。2020年はサケ、ブリ、アジ、サバ、タイ、イワシ、カレイ、カツオ、マグロ、サンマの順である。サケが最上位となるのは全国の動向と同じで、平準化がみられる。マグロとカツオは60年以上購入数量が少ないままだった。観光資源としてごまサバが宣伝され、青魚を好むというが、2000年以降は減少している。

【キーワード】 福岡市、高度経済成長期、鮮魚購入数量、マグロ、サバ